台風27・28号、豪雨の恐れ

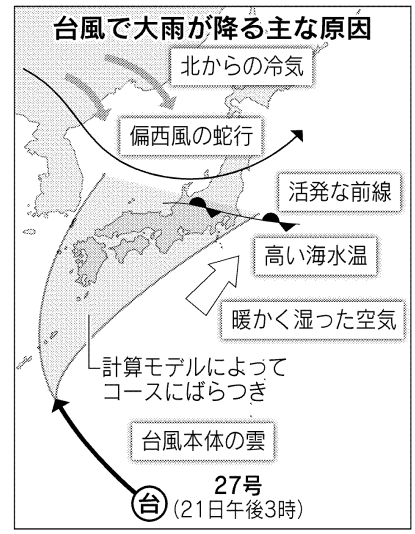
高い海水温・活発な前線・・・

早期から警戒必要

南海上の3つの台風や熱帯低気圧が日本列島をうかがっている。台風27号は一時、中心気圧が920ヘクトパスカルまで下がり大型で非常に強い。台風28号も強まりつつある。2つの台風は一定の距離を保ちながら、今週末にかけて日本に接近しそうだ。台風の周りを吹く風による温かく湿った空気の流入、高い海面水温、活発な前線の停滞などの条件がそろうと局地的な豪雨のおそれもある。

台風の進路は米欧の気象機関や大学、軍、気象会社などが独自に計算している。精度が高いと定評がある欧州中期予報センターは台風27号が25日に西日本に上陸後、日本を縦断して東海上に抜けると予測。米軍は関東付近に上陸すると予想する。

米気象会社アキュウェザーは九州付近から朝鮮半島付近に抜けるとしていたが、もっと東を通る可能性があると判断を変えつつある。日本の気象庁は日本の南岸近くを通るとの見方を強めている。



台風が日本の沖合にあっても太平洋側の地方で雨が強まる場合がある。今の時期は偏西風の蛇行などにより、北日本上空に冷たい空気が南下しやすい。台風が南から温かい湿った空気を運び込むと、冷たい空気との境目に前線が停滞、活発化して雲が発達し大雨をもたらす。

局地的な気温や海面水温、地形などの効果も見逃せない。気象研究所の加藤輝之室長によると、台風26号の接近時には房総半島の大雨により空気が冷やされ、南海上の暖気との間で前線が発生。伊豆大島の豪雨の一因となった。茨城県の鹿島灘沖でも海面水温の影響で冷たい北東風が強まり、局地前線ができた。

名古屋大学の坪木和久教授の分析では、伊豆大島の山岳部付近で上昇流が特に強かった。標高は低いが暖気の上昇が強まり、雲の発達を促したとみられる。上空5000メートル付近にも緩やかな上昇気流が発生し、大量の雪の粒があった。これらが組み合わさり、雨が強まったとみている。

日本の南岸沿いでは紀伊半島―伊豆半島付近で温かい黒潮が大きく南に蛇行後、東方へ向かっている。「黒潮の位置が台風に伴う雲の発達や雨の降り方に影響する可能性もある」と日本大学の山川修治教授は指摘する。

今後、台風28号も日本に近づく見通し。2つの台風が隣接すると一方が他方の周りを回るなど、互いに影響し合う。複雑な動きをしながら勢力が変わることも多い。コースの予測は一層難しくなるが、広範囲で大雨の条件がそろう可能性があり早い段階から警戒が必要だ。

（編集委員　安藤淳）

掲載日　2013年10月22日　日本経済新聞朝刊　016ページ
(C)日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。